

# 平成 30(2018)年度病害虫発生予察特殊報第 4 号

平成 30(2018)年 12 月 20 日  
栃木県農業環境指導センター

## トルコギキョウ斑点病の発生について

1 病原 *Pseudocercospora nepheloides* (= *P. eustomatis*)

2 発生作物名：トルコギキョウ

3 発生経過

平成30(2018)年11月、栃木県内の施設栽培のトルコギキョウにおいて、葉にすす状の斑点を生じる病害が確認された。横浜植物防疫所に同定を依頼したところ、本県では未発生の*Pseudocercospora nepheloides*によるトルコギキョウ斑点病であることが確認された。

本病は、平成20(2008)年に福岡県で初めて発生が確認され、平成29(2017)年には福岡県、高知県、大分県、熊本県、宮崎県、長崎県で、平成30(2018)年には和歌山県、沖縄県、広島県、福島県、宮城県、島根県、千葉県、岡山県で特殊報が発表されている。

4 病徴

はじめ、葉の表に5～10mm程度の退緑斑を生じ、後に葉の表裏に黒～灰褐色のすす状病斑となる。病斑は下位葉を中心に発生し、その後、上位葉へと伸展する(写真1、2、3)。

病斑上には小黒点(分生子座)が多数形成される(写真4)。

5 病原菌と伝染

病原菌は、糸状菌の一種で不完全菌に属する。分生子座は濃褐色で直径26.9～45.6 $\mu\text{m}$ (写真3)、分生子柄は淡褐色～褐色で子座上に束生する。分生子は無色(淡オリーブ色)、倒棍棒状で、大きさは25.7～43.3 $\mu\text{m}$ ×3.8～4.9 $\mu\text{m}$ 、0～7個の隔壁を有する(写真5)。

本病は盛夏を除き、ほぼ年間を通して発生するが、特に春から秋の多湿条件下で多発する。生態や伝染環についての詳細は不明であるが、育苗中および本圃で発生し、病斑上に形成される分生子により伝染する。

なお、現在確認されている宿主はトルコギキョウのみである。

6 防除対策

- (1) 多湿条件で発生が助長されるため、施設内の通風および換気に努める。
- (2) 発病を見つけた場合は、すみやかに発病葉を取り除き、ほ場外に持ち出して適切に処分する。
- (3) 発病葉を取り除いた後、次の薬剤を散布する。

薬剤名	希釈倍数	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法
ダコニール1000	1000倍	100～300L/10a	—	6回以内	散布



写真1 圃場での発病状況



写真2 下位葉の発病状況



写真3 病斑 (左:表、右:裏)



写真4 葉裏の病斑に形成された分生子座 (小黒点)



写真5 分生子

## 7 引用文献

- 千葉県(2018)平成30年度病害虫発生予察特殊報第1号  
岡山県(2018)平成30年度病害虫発生予察特殊報第3号  
成山秀樹(2018):植物防疫 第72巻第9号46~49

---

詳細は、農業環境指導センター (Tel 028-626-3086) までお問合せ下さい。  
病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部 (@tochigi\_nousei)」、農業環境指導センターホームページ (<http://www.jpnpn.ne.jp/tochigi/index.html>) でもご覧になれます。